

日本版境界尺度（JBQ）の作成および精神病理・創造性との関連の検討

児玉恵美

Development of Japanese Boundary Questionnaire (JBQ) and an examination of its relation to psychopathology and creativity

Emi KODAMA

Hartmann (1991) は、さまざまな刺激の出入りや、対人関係における距離感などにかかわる「心的境界の薄さ／厚さ」を測定する尺度として、「Boundary Questionnaire (境界尺度)」を開発している。本研究では、境界尺度を邦訳し、安定した因子構造を持つ日本版境界尺度を作成することを目的とした。調査1では大学生460名に質問紙調査を実施し、探索的因子分析によって「境界の脆さ」、「明確な境界を嫌うこと」、「大人と子どもの境界」、「意識された境界の曖昧さ」、「境界設定のこだわらなさ」の5因子構造が示された。調査2では先行研究を元にMMPIのパラノイア尺度・K尺度、没入尺度、創造性検査、悪夢経験との関連を調べた結果、妥当性が確認された。さらに、「境界の脆さ」は精神病理に関わる因子であることが推定され、一方で「意識された境界の曖昧さ」が創造性に関係している因子であることが示唆された。

キーワード：日本版境界尺度、精神病理、創造性

問題と目的

目前のクライアントは、日常の出来事をどのように感じ、体験する人なのか。他者とどのように距離を取り接しているのか。そして内的・外的な刺激からどの程度影響される人なのか。これらの問いに対し、本研究では「境界 (boundary)」の観点からアプローチを試みる。

境界概念はどのように発展してきたか

境界という言葉を用いて人格を記述し理解するとき、これまでしばしば自我境界の概念が引用されてきた。Freud (1900) は、夢を分析する中で「無意識と前意識の境界線」について述べ、刺激に対する防御物または壁の重要性を説明している。その後、Tausk (1919) が自我意識の境界を意味するものを「自我境界」と言い表し、Federn (1952) がその概念をさらに発展させていった。Federn (1952) は、自我とエスとの間に「内的自我境界」、自我と外界との間に「外的自我境界」を考えたことで注目される。そして現在においても臨床の場では、これらの自我境界が極端に透過的であると、

無意識的空想と現実の区別や、自己と他者との区別が難しくなり、幻覚や妄想、思考伝播など生じることが論じられている。このように、うまく形成されていない自我境界や透過的な自我境界については、重篤な精神病理を説明する際に述べられてきた。

これまでに、自我境界を測定する尺度がいくつか開発されている。その中でも、ロールシャッハ・テストを用いて自我境界とほぼ同義のものとして身体像境界を開発、発展させた Fisher & Cleveland (1958) による「身体像境界得点」や、Landis (1970) による「自我境界測定」が主なものとして挙げられる。以後さまざまな研究者により、ロールシャッハ・テストに表れる境界の側面と、それを知覚する人の特性との関係を示す研究が積み重ねられている (木場・木場, 1981; Howard, 1985; 小出, 2000など)。

Hartmann による境界概念

Hartmann (1989) は、悪夢に悩まされる人たちを観察し治療を行って行く中で、彼らに共通す

る「驚くほど無防備で、感受性が強く、情緒的で人一倍共感的、強い情動に巻き込まれやすく、傷つきやすく、小さい頃から芸術性・創造性に長けている」という特徴を発見し、ものやことが一斉に溢れ出し、それらを区別するためのバリアや壁が薄いという特徴から、彼らを“thin boundaries (境界の薄い人たち)”と名付けた。そしてこのような境界の構造は、職業選択、他者とのかわり方、健康度など、生活のあらゆる側面に関連しているという考えに基づき、新しい人格特性として境界測定尺度“Boundary Questionnaire (以下BQ)”を作成した(Hartmann, 1991)。BQは全部で138項目からなっており、得点が高いほど「境界が薄く」、低いほど「境界が厚い」ことを示す。この中には、異なったタイプの境界ができるだけ多く集められている。例えば、外界からの刺激の入り方、睡眠時—夢—覚醒時の関係、身体像境界、対人関係における距離感、周囲の環境に対する好み、などである。Hartmann (1991)は、これら全てに thick boundary (厚い境界) と thin boundary (薄い境界) を想定し、私たちのほとんどはこの thick と thin の両方が混ぜ合わさった境界を持つと考えている。また、私たちの周りには様々な境界が存在するが、境界とは自然に表れたものではなく、私たちの心の中で区切り、分類することで作られるのだと述べ、自我境界に留まらない広い領域を扱うこれらの境界について“boundary in the mind” (心的境界) と説明している(Hartmann, 1991)。

Hartmann (1991)は、この心的境界には遺伝要因・環境要因どちらもが関係しており、長い人生を通して変化しうる側面もあると想定している。さらに、一個人の中で時と場合に応じて境界のあり方が変化し、その程度やバランスにより、境界の薄いことが精神病的なものに関連することもあれば、他方で、芸術や創造性とも結びつくと述べている(Hartmann, 1991)。そして、例えば「ばらばらに崩れる感じ」や「現実からファンタジーを区別できないこと」は精神病理の特に統合失調症に起こりうる症状と重なり、境界が薄いことは、危険な状態で時に精神病状態を予測するものとなるが、その一方「感受性が強い」、「深く感じ入ること」は、芸術家や創造的な人たちに共通するこ

とだと考察している。

BQを使用した調査の結果から(Hartmann, 1991)、女性が男性よりも有意に境界が薄いこと、加齢に伴い境界が厚くなる傾向が述べられている。また、MMPIのパラノイア尺度、その他没頭性、被催眠性や感受性などと境界の薄さに関係し、検査を受ける防衛的態度を示すMMPIのK尺度やL尺度が境界の厚さと関係していることも示されている。その後Levin, Galin, & Zywiak (1991)はBQの境界の薄さと創造性との間に弱い正の相関を示し、Schredl, Nurnberg, & Weiler (1996)は、BQで境界の薄い人は幼児期の悪夢報告が多く、特に悪夢を見始めた年齢が低いことを示している。

本研究の目的

Hartmannの境界概念には、先述した身体像境界や自我境界も内包され、私たちにかわる様々な境界に関するさらに広い領域が扱われているのが特徴である。そして、境界の薄さや透過性は、これまで精神病や他の病理状態を引き起こす、欠損や脆弱性などといった文脈で度々用いられてきた(馬場, 1967など)歴史があるが、Hartmannの境界概念はそこに芸術性や創造性など肯定的な側面を見出した点で画期的である。しかし、身体像境界や自我境界を個別に測定する尺度については先述したが、私たちにかわるさまざまな境界の側面を包括的に測定する尺度は、本邦において筆者が知る限りこれまで皆無である。

臨床場面では、しばしばクライアントの境界の問題が話題にされることがあるが、これまで臨床経験の中から予測してきたことを、BQを用いることで実証的に示すことが期待できる。ただし、BQは全138項目からなり、欧米文化に特有の項目が多く含まれている。従って、我が国で使用するためには日本文化に適応可能な項目の抽出が必要となる。また、BQは因子分析(主成分分析、バリマックス回転)の結果、解釈不可能であった13番目の因子を排除し最終的に12因子構造としているが、直行回転を行いながらも一つの項目が複数の因子にわたって負荷量が高い重複構造を認めている。そして因子数が多く項目が重複しているために、「個人的境界」「世の中の境界」「BQ全体」の三つの視点で考察するに留まっている。

Hartmann (1991) も述べているように、境界全体が薄い／厚いことが即問題になる訳ではなく、様々な境界の程度やそれらが組み合わさったバランスが重要であることを考慮すれば、因子ごとに取り扱い、詳細な検討を行うことが必要である。そうすることで、より個人のパーソナリティ特性を特徴付け、さらには臨床場面で実際に活用できる尺度として発展させることもできるであろう。そこで、本研究ではBQの因子数の多さとそれに伴う解釈の曖昧さを排除するため、一つの項目に高い負荷量で二つ以上の因子が寄与しない因子構造を特定する目的で因子分析を繰り返し行い、各因子についても積極的に議論を行う。その際、精神病理や創造性と関係する因子が抽出されることが想定され、Hartmann (1991) の重要な指摘である境界の薄さと精神病理・創造性との関連について、より具体的に議論することができると考える。

以上より本研究では、Hartmannの心的境界の概念に基づき、調査1でBQの日本版（Japanese Boundary Questionnaire：以下JBQ）作成とその信頼性を検討し、調査2で他の尺度との関連からJBQの妥当性を確認する。

調査1

目的

Hartmann (1991) のBQを翻訳し、わが国における心的境界を測定する日本版尺度を作成し、信頼性を確認することを目的とした。

方法

翻訳過程 まず、本尺度の原著者であるHartmannに、尺度を研究用として日本語に翻訳し、日本版を作成する許可を得た。次に、筆者を含む臨床心理士二名ができるだけ原版に忠実な日本語に翻訳した後、意味が食い違った部分や表現形式について話し合いの上で調整し、日本語訳を作成した。その後、英語圏に在住の日本人にバックトランスレーションを依頼し、原版とバックトランスレーションしたものを、英語を第二言語とする留学生と筆者とでチェックし、その意味や表現の異なる項目を再度検討した。さらに、筆者を含む臨床心理士三名により最終的な日本語のチェックがなされた。また、臨床群にも適用できる表現となる

よう精神科医一名が最終チェックを行った。

調査対象 A 短期大学、B大学の学生計460名を調査対象とした。欠損値を含む回答を除いた有効回答者は全体の95.9%である441名（男性198名、女性243名）、平均年齢は男性19.11歳（ $SD=0.78$ ）、女性19.14歳（ $SD=1.01$ ）であった。またそのうち48名（平均年齢20.36歳、 $SD=0.68$ ）に一ヶ月の間隔をあけて再検査を実施した。

調査内容 上記の手順を経て日本語に訳された境界尺度138項目のうち、文化的な要因を考慮し「マリファナにより、いつもとは違う行動をとったことがある」を除く137項目の質問紙調査を施行した。各項目は「まったくあてはまらない（0点）」から「とてもあてはまる（4点）」の5件法からなる。この尺度は得点が高いほど、より境界が薄いことを示すものである。

手続き 質問紙調査は講義時間を利用して配布しその場で実施、回収した。なお、調査への協力は任意とし、質問紙には個人が特定されないことを明記した。

結果と考察

JBQの因子分析 全137項目に対して、天井効果・フロア効果を確認するため平均±標準偏差の値を算出し、尺度の上限値4、下限値0を超えている21項目を削除後、因子分析（重み付けのない最小2乗法、直接オプティム回転）を行った。その結果、固有値の減衰状況（9.07, 6.51, 3.86, 3.82, 2.90, 2.44, 2.36…）と因子の解釈可能性から5因子構造が妥当であると判断した。そこで、共通して因子負荷量.30以下である項目から順に除く作業を重ね、加えて2因子以上で.35以上の負荷を持つ項目を除き再度回転させた結果、最終的に5因子52項目をもってJBQとした。分析の過程で排除された項目は、その多くが宗教や国境に関するものなど欧米文化特有の項目であった。さらに本研究では、複数の因子に負荷を及ぼす項目を排除する形で繰り返し因子分析を行ったことから項目数が減少していった。Table 1に因子負荷量および因子間相関を示した。

第1因子は“白昼夢の中で、人々が互いに混ざり合っていたり、ある人が別の人物に代わったりするようなことがある”、“音楽を聞くと、時々没頭してしまうあまりに現実世界に戻ってくるこ

Table 1 JBQの因子分析構造(重み付けのない最小2乗法, 直接オブリミン回転)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1: 境界の脆さ ($\alpha = .85$)					
28. 白昼夢の中で、人々が互いに混ざり合っていたり、ある人が別の人物に代わったりするようなことがある	.642	.106	.048	.108	.014
31. 何かを必要とする時、そのことに没頭するあまりに現実世界に戻ってこることが難しくなることがある	.604	-.005	.231	.268	.043
35. 音楽を聞くとき、時々没頭してしまうあまりに現実世界に戻ってこることが難しくなることがある	.587	-.010	.098	.189	-.018
41. 私の見る夢は異常に鮮明なものであるため、後に、目覚めているときの現実世界からも、それらを区別することができない	.553	-.082	.077	.094	.032
42. しばしば異なる感覚と一緒に体験することがある。例えば色を嗅いだり、音を見たり、香りを聞いたりする	.538	-.047	.127	.151	.040
45. 自分が想像したことなのか、それとも実際に起こった事であるのかわからなくなるような体験をしたことがある	.533	-.116	.025	.341	-.059
46. 会話やある音楽を思い出す時、それがまさに私の目の前で再現されているかのように聞こえる	.530	.086	.146	.289	.017
30. 夢の中で、時々人々が互いに混ざり合っていたり他の人物になったりする	.520	.031	.076	.080	-.097
17. 何か恐ろしいことが起こってきた時にはいつでも、その恐ろしい出来事とかかわりのある悪夢や空想やフラッシュバック(ある場面で、過去の出来事などが瞬間的にあらわれること)を体験する	.512	.079	.088	.229	.189
33. ゲームや何かの遊びにまさに夢中になっている時、そのゲームを止めて現実世界に戻ってこるのが時々大変になる	.504	.002	.070	.220	.017
5. 自分の身体や他の誰かの身体が、突き刺されたり、傷つけられたり、バラバラに引きちぎられるような夢や白昼夢(昼間起きていたときに、さまざまな情景を心に描き、空想にふけること)や悪夢をみる	.492	.097	-.017	.342	.000
39. 夢と夢との間に目が覚める	.455	-.053	.079	.186	-.014
40. 世界と一体になっているように感じる	.445	.161	.205	-.099	.042
6. 時々、自分が考えているのか、それとも感じているのかわからなくなる	.443	-.016	.074	.400	.094
18. 時々、自分が誰なのか確信が持てないことがある	.442	.008	-.044	.364	.074
48. 自分が性別の異なる誰かになることを簡単に想像できる	.359	.013	.066	-.017	.055
因子2: 明確な境界を嫌うこと ($\alpha = .76$)					
49. はっきりした明確な境界が好きだ(※)	.040	.555	.008	-.028	-.045
22. 良い関係においては、全てが明確に定義され説明されている(※)	.081	.547	.047	-.094	.158
16. 全てのものに適所があり、全てのものはそこに納まるべきである(※)	.071	.509	.112	.037	.139
29. 写真や絵にはしっかりと固定された枠がとても重要である(※)	.090	.503	.074	.000	.153
51. まっすぐの線が好きだ(※)	.010	.446	-.008	-.009	.003
50. 部屋がきっちりとした壁で区切られ、それぞれの部屋がはっきりとした機能を持つ家が好きだ(※)	-.029	.441	.038	-.087	.075
43. 男は男、女は女である。それゆえその区別を維持することはとても大切なことである(※)	-.065	.435	.144	-.046	-.012
37. 成功とはその大部分が、良く組織化されていることと、きちんと記録を残すことによって、成り立っている(※)	.121	.428	.188	.007	.098
13. はじまり、中盤、終わり、がはっきりしている物語が好きだ(※)	.107	.401	.138	.004	.168
32. 私は、何かを企画して実行する時には、注意深く細かい計画を作り、それにきっちりと従う(※)	-.004	.390	.030	.089	.210
4. 組織の中においては、みんな決まった場所と専門の役割を持つべきだ(※)	-.074	.374	.071	.046	.102
19. 物事は詳しく正確に説明される方が好きだ(※)	.070	.374	.060	.267	.168
44. 街の中のどこが安全でどこが安全でないかをしっかりと分かっている(※)	.071	.371	.111	-.135	.126
36. 私は現実的な人間で、馬鹿げたことはしない(※)	-.055	.361	-.102	-.092	.079
26. 私は幾何学が好きだ。なぜなら単純でわかりやすい規則があり、全てが適合しているからだ(※)	.147	.358	.122	-.034	.053
21. くっきりとした輪郭でにじみのない線の絵が好きだ(※)	-.025	.353	.033	-.069	-.056
9. 考えるとき感じる時とがあるが、それらは区別されるべきだ(※)	.033	.347	.111	-.045	.104
52. まっすぐの線よりも波状や曲がった線の方が好きだ	.131	-.334	.110	.074	.049
15. 国は、他の国々の利益や国境についてと同じように自分の国の利益とその国境についても明確に示なくてはならない(※)	-.033	.333	.066	.140	-.022
因子3: 大人と子どもの境界 ($\alpha = .72$)					
20. 良い教師は、どこか子供のままの部分を持ち続けている	.183	.076	.693	.055	-.048
25. 良い親は、多少子供のままの部分も持ち合わせているはずだ	.185	.061	.665	.060	-.122
27. 良い親は、自分の子供に感情移入し、同時に子供の友だちや遊び相手になることができなくてはならない	.087	.194	.555	-.005	-.036
14. 芸術家は、どこか子供のままの部分を持っていると違うと思う	.094	.139	.535	.227	-.010
8. 良い教師は、子供の個性がそのまま保たれるように手助けをする必要がある	.054	.009	.442	.004	.125
11. 人々がお互いをもっと信じるようになりさえすれば、世界の多くの問題が解決されるだろうと思う	.093	.100	.382	-.087	.095
3. 子供は、大きくなってからしばしば失ってしまうような、喜びや驚きにおける特別な感性を持っていると思う	-.012	-.019	.338	.092	.061
因子4: 意識された境界の曖昧さ ($\alpha = .67$)					
1. 私の中でいろんな感情が互いに混ざり合っている	.290	-.011	.031	.672	-.003
23. 私の中でいろんな考えが互いに混ざり合っている	.235	-.062	-.038	.626	-.087
24. 誰かと深く関わりすぎることは、時に恐ろしいことだ	.221	.013	-.014	.447	.176
38. 誰でも時々まっよつと狂気になることがある	.269	-.108	.129	.420	-.090
47. 全ての男性が彼等の中にどこか女性的なものを持っており、全ての女性がどこか男性的なものを持っている	.161	-.038	.136	.412	.013
10. 私は傷つきやすい	.140	.098	.110	.353	.104
34. 健全な人々、何か問題を持った人々、精神病的または狂気だと思われる人々との間を、はっきりと区別するような線はない	.054	-.222	.079	.340	.017
因子5: 境界設定のこだわらなさ ($\alpha = .65$)					
2. できる限り整理するのが好きだ(※)	-.039	.072	.073	.037	.790
7. 自分の机や作業机をきちんと整理整頓している(※)	-.020	.023	-.036	-.024	.697
12. お金の計算をしたり、家計簿をつけたりするのが得意だ(※)	.045	.195	.021	.038	.362
因子間相関					
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1		-.05	.16	.42	.00
因子2			-.15	.04	.15
因子3				.10	.00
因子4					-.02

(※)は逆転項目

とが難しくなることがある”などからなり、自分のコントロールを超えた状態で、境界が融合したり区別がつかなくなることに関係する項目と考え「境界の脆さ」とした。第2因子は“はっきりした明確な境界が好きだ（逆転項目）”などからなり、目に見えて意識的に確認できる境界に対する好みに関係する項目と考え「明確な境界を嫌うこと」とした。第3因子は“良さ教師は、どこか子どものままの部分を持ち続けている”などからなり、大人の感性と子どもの感性の連続性に関係する項目と考え「大人と子どもの境界」とした。第4因子は“私の中でいろんな感情が互いに混ざり合っている”，“全ての男性が彼等の中にどこか女性的なものを持っており，全ての女性がどこか男性的なものを持っている”などからなり、自分の境界の曖昧さを実感し意識しつつ，その状況を受け入れたり不安に思うことに関係する項目と考え「意識された境界の曖昧さ」とした。第5因子は，“できる限り整理するのが好きだ（逆転項目）”，“自分の机や作業机をきちんと整理整頓している（逆転項目）”などからなり，目に見えて意識的に確認できる境界を自ら作り整理することに関係する項目と考え「境界設定のこだわらなさ」とした。

次に因子間相関について、「境界の脆さ」と「意

識された境界の曖昧さ」の間に中程度の正の相関がみられた。このことから両者には，感覚的な体験を伴い，現実と無意識的内容の境界が薄く思考や感情が混ざりやすいといった，内的な境界の薄さという共通点があることがうかがえた。しかし他の因子間にはほとんど相関がみられなかったため，各下位因子は境界の異なった側面を表していると考えられる。従って，境界が全体としてthinかthickかだけでなく，各々の境界の特徴や影響を検討していく必要があると考える。

JBQの基本統計量と信頼性の検討 下位尺度ごとの合計得点を下位尺度得点とし，52項目全てを加算したものをJBQ総得点として算出した。各下位尺度得点およびJBQ総得点の平均値と標準偏差，さらに各下位尺度得点の平均値を下位項目数で割った項目平均値をTable 2に示した。

次に尺度の信頼性を検討するためCronbachの α 係数を算出したところ，各下位尺度の α 係数は.65～.85，尺度全体の α 係数が.82とほぼ十分な内的整合性を有しており，信頼性が確認された（Table 2）。さらに，調査対象者数が少ないため補足的な資料に留まるが，1ヶ月の間隔をあけて実施した1回目と2回目の調査におけるJBQの得点間の相関係数を算出したところ， $r=.61\sim .87$

Table 2 JBQの基本統計量

	M (n=441)	SD	項目平均値	信頼性	
				α	r(n=48)
境界の脆さ	22.33	11.07	1.40	.85	.87
明確な境界を嫌うこと	41.84	9.11	2.20	.76	.71
大人と子どもの境界	18.15	4.52	2.59	.72	.61
意識された境界の曖昧さ	19.47	4.19	2.78	.67	.65
境界設定のこだわらなさ	6.91	2.77	2.30	.65	.78
JBQ 総得点 (52項目)	108.59	16.78	2.09	.82	.84

Table 3 JBQの男女別平均得点

	男性 (n=198)	女性 (n=243)	t
境界の脆さ	20.99(11.14)	23.42(10.91)	2.31 *
明確な境界を嫌うこと	39.82(10.12)	43.49(7.84)	4.19 ***
大人と子どもの境界	18.08(4.59)	18.21(4.47)	0.32
意識された境界の曖昧さ	19.00(4.35)	19.86(4.02)	2.15 *
境界設定のこだわらなさ	6.91(2.93)	6.91(2.65)	0.02
JBQ 総得点	105.01(16.72)	111.50(16.29)	4.12 ***

() はSD *** $p < .001$, * $p < .05$

とほぼ十分な再検査信頼性がみられた (Table 2)。

男女差の検討 JBQ の総得点, 下位尺度得点の男女別平均値と標準偏差を Table 3 に示した。 t 検定を用いた男女の得点の比較では, JBQ 総得点 ($t=4.12, df=439, p<.001$) において女性の得点が有意に高く境界が薄い結果であり, 先行研究 (Hartmann, 1991) を支持した。さらに因子別では「境界の脆さ」 ($t=2.31, df=439, p<.05$), 「明確な境界を嫌うこと」 ($t=4.20, df=439, p<.001$), 「意識された境界の曖昧さ」 ($t=.215, df=439, p<.05$) において女性の得点が有意に高かった。男女の性差に関する精神医学研究において, 女性は感情の読み取りや共感性が高く, 男性は分類や組織化が得意であることが報告されている (Baron-Cohen, Richler, Bisarya, Gurunathan, & Wheelwright, 2003)。それゆえに, 感覚的体験に関する「境界の脆さ」や「意識された境界の曖昧さ」では女性が高く, 分類・組織化傾向の弱さに関わる「明確な境界を嫌うこと」で男性が低かったのだと思われる。

調査2

目的

JBQ の妥当性を検討することを目的とした。その際, Hartmann (1991) の先行研究を元に MMPI のパラノイア尺度・K 尺度, 没入尺度と, Levin et al. (1991) に従い S-A 創造性検査との関連を検討した。さらに, Hartmann の境界概念は元来悪夢障害の人の治療から導きだされた概念であるため, 悪夢経験との関連も検討した。

パラノイア尺度 (MMPI 新日本版研究会編, 1993) : MMPI の臨床尺度の一つで, 対人関係上の敏感さや過度の感受性と邪推, 猜疑の傾向を測定する。全40項目からなり, 3 件法で評定される。JBQ の得点が高い境界の薄い人たちは, 様々な刺激が入りやすい人たちであるため, JBQ とパラノイア尺度との間には正の相関が予想される。

K 尺度 (MMPI 新日本版研究会編, 1993) : MMPI の受検態度の歪みをみる妥当性尺度の一つで, 検査に対する防衛的態度や警戒の程度, 自己に対する評価をみる。得点が高いほど自己防衛の態度が高い。全30項目からなり, 3 件法で評定

される。JBQ の得点が高い境界の薄い人たちは, 防衛的態度に薄く率直な人だと考えられるため, 心理的に防衛的態度を示す K 尺度との間には負の相関が予測される。

没入尺度 (坂本, 1997) : 先行研究 (Hartmann, 1991) の没頭性に対応する尺度として, 本研究では没入尺度を使用した。この尺度には, 自己へ注意を向けやすくそれを維持させやすい傾向としての自己没入と, ある一つの外的な対象に向けた注意が持続しやすい傾向としての外的没入の二側面が含まれているが, 本研究では両者を合わせた没入傾向全体得点を用いた。全19項目からなり, 5 件法で評定される。境界が薄い人たちは, 人一倍感じ入る力が強く情動に巻き込まれやすいため没入傾向が高いと考えられ, JBQ と没入尺度の間には正の相関が予測される。

S-A 創造性検査 -C 版 (創造性心理研究会編, 1969) : 創造活動領域を測定する3種類の下位テストからなる。下位テストは, “応用力”, “生産力”, “空想力” をみる質問で構成されており, 制限時間内で思いついたことをできるだけたくさん書いてもらい, 得点が算出される。さらに各回答の内容から4つの思考特性として, “流暢性” (思考の速さ), “柔軟性” (思考の広さ), “独自性” (思考の独自さ), “具体性” (思考の深さ), 4つの思考特性を合計した“創造的思考総合”の得点が算出される。Hartmann (1991) は芸術家の境界の薄さについて述べており, JBQ と創造性との間には正の相関が予想される。

悪夢経験 : DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000/2002) を参考に, 悪夢を「夜中, 思わず目を覚ましてしまうような, 不安や恐怖を伴う夢」と定義し, その経験について“現在ある”, “今はないが昔ある”, “今も昔もない (以下“ない”と略記)”の三択で評定してもらった。Hartmann (1989) は, 悪夢に悩まされる人たちの治療の中から彼らに共通する境界の薄さという特性をまとめ, BQ を作成している。そのため, 悪夢経験を有する人はそうでない人よりも境界が薄く, JBQ の得点が高いことが予測される。

方法

調査対象

1) パラノイア尺度, 没入尺度は, 調査1の対

象者のうち137名 (男性98名, 女性39名; 平均年齢19.4歳, $SD = 1.07$) から回答を得た。

2) K 尺度, 悪夢経験は, 調査1の対象者のうち, 1)とは異なる対象者 111名 (男性61名, 女性50名; 平均年齢21.0歳, $SD = 2.37$) から回答を得た。

3) S-A 創造性検査は, 調査1の対象者とは異なる C 大学の学生109名を調査対象とした。欠損値を含む回答を除いた有効回答者は全体の98.2%である107名^{注)} (男性38名, 女性69名), 平均年齢は男性20.42歳 ($SD=1.54$), 女性20.55歳 ($SD=4.20$) であった。

Table 4 パラノイア尺度, K 尺度, 没入尺度, S-A 創造性検査の平均値

パラノイア尺度 ($n=137$)	15.44(4.11)
K 尺度 ($n=110$)	16.82(3.88)
没入尺度 ($n=137$)	36.55(11.46)
S-A 創造性検査 ($n=107$)	
応用力	34.36(11.79)
生産力	37.90(10.93)
空想力	41.81(11.50)
創造性思考総合	114.07(27.82)
流暢性	32.31(8.86)
柔軟性	42.58(8.19)
独自性	15.53(6.41)
具体性	23.73(7.61)

() は SD

手続き 調査1と同じ手法で行った。なお, S-A 創造性検査-C版については, 東京心理総合研究所の実施要領に従って施行し, その後採点を同研究所に依頼した。

結果と考察

まず, パラノイア尺度, K 尺度, 没入尺度, S-A 創造性検査の平均値および標準偏差を Table 4に示した。また, JBQ 総得点, 下位尺度との相関関係を Table 5に示した。

JBQ 総得点はパラノイア尺度, 没入尺度, さらにS-A 創造性検査の“応用力”, “創造的思考総合”, “流暢性”, “柔軟性”, “具体性”と弱い正の相関, K 尺度と弱い負の相関を示した。以上の結果より, JBQ における境界の薄さは, パラノイア尺度や没入尺度の得点の高さと関連し, K 尺度に示される防衛的態度とは負の相関だとする先行研究 (Hartmann, 1991) を支持した。さらに創造性との関連においても, Levin et al. (1991) の結果を支持した。このことから, 今回作成した JBQ について一定の妥当性が示された。

次に JBQ の下位尺度ごとに, 人格特性を測定するパラノイア尺度, K 尺度, 没入尺度との関連を検討した。「境界の脆さ」, 「意識された境界の曖昧さ」は共に, パラノイア尺度, 没入尺度と弱い正の相関, K 尺度と中程度の負の相関が示された。現実/非現実の世界や思考・感情が混ざりや

Table 5 JBQ とパラノイア尺度, K 尺度, 没入尺度, S-A 創造性検査との相関

	境界の脆さ	明確な境界を嫌うこと	大人と子どもの境界	意識された境界の曖昧さ	境界設定のこだわらなさ	JBQ 総得点
パラノイア尺度	.37 ***	-.05	.11	.33 ***	-.03	.31 ***
K 尺度	-.41 ***	.23 *	-.02	-.40 ***	-.03	-.23 *
没入尺度	.33 ***	-.29 **	.16	.39 ***	-.02	.26 **
S-A 創造性検査						
応用力	.23 *	.04	.14	.36 ***	.11	.28 **
生産力	.14	.06	-.02	.23 *	-.11	.14
空想力	.09	.13	.15	.24 *	-.03	.19
創造性思考総合	.19 +	.10	.11	.34 ***	-.01	.26 **
流暢性	.18	.06	.06	.26 **	-.02	.21 *
柔軟性	.20 *	.09	.20 *	.36 ***	-.04	.28 **
独自性	.11	.05	.06	.25 **	.03	.15
具体性	.18	.13	.07	.35 ***	.02	.26 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

すい状態は、自己防衛を弱めることに繋がり、また感受性や刺激に対する敏感さにも結びつくと考える。「明確な境界を嫌うこと」は、K尺度と弱い正の相関、没入尺度と弱い負の相関が示された。これは他の因子とは逆の相関関係であり、明確な境界を意識し好むこと (thick) は、自己が外的刺激から守られている感覚に繋がり自己防衛が低いことや、安心して物事に没頭できることにも関係するのではないだろうか。なお、「大人と子どもの境界」、「境界設定のこだわらなさ」では相関が示されなかった。

続いて、JBQ 下位尺度とS-A 創造性検査との関連を検討する。「境界の脆さ」は“応用力”、“柔軟性”との間に弱い相関が示された。“応用力”の課題は、これまでの過去の経験に思いを巡らせて回答するような課題であるため、意識と無意識、夢と現実などを行き来しやすい「境界の脆さ」において、思考が広がり、かつ繋がりがやういことが関係しているのではないだろうか。これは、知識や経験を幅広く活かし柔軟に思考する“柔軟性”にも当てはまるだろう。「大人と子どもの境界」では、“柔軟性”とのみ弱い相関がみられた。大人になっても子どものような感性を持ち続けるためには、発想の柔軟性が求められるのだと考える。「意識された境界の曖昧さ」では、下位テストと思考特性の全てに弱い相関が示された。このことから、曖昧な自己や状況を実感し認識している「意識された境界の曖昧さ」が、柔軟で独創的に実を伴った思考を生み出し、実益的な創造力をもたらすという意味で、もっとも創造性に関係している因子であった。一方、「明確な境界を嫌うこと」、「境界設定のこだわらなさ」とは相関がみられなかつ

た。特に「境界設定のこだわらなさ」はどの尺度とも相関が示されなかったのだが、目に見える境界を外的世界に設定することはかなり積極的な取り組みであり、他の因子が表す境界とは異質なものとと思われる。

さらに悪夢経験について、“現在ある”と答えた人は111人中24人、“今はないが昔ある”は30人、“ない”は57人であった。この悪夢経験3群を一要因とする分散分析を行った結果、JBQ 総得点に有意な差がみられた ($F(2, 108) = 6.66, p < .01$) (Table 6)。その後、Bonferroniによる多重比較を行ったところ、“現在ある”の方が“ない”よりも有意に得点が高く、また、“今はないが昔ある”の方が“ない”よりも得点が高い傾向がみられた。このことから、悪夢経験との関連においてもJBQにおける一定の妥当性が示された。続いてJBQ 下位尺度と悪夢経験3群との検定の結果、この3群において「境界の脆さ」($F(2, 108) = 4.80, p < .01$)、「明確な境界を嫌うこと」($F(2, 108) = 4.73, p < .05$)に有意な差がみられた。多重比較の結果、「境界の脆さ」において、“現在ある”の方が“ない”に比べ有意に得点が高かった。さらに「明確な境界を嫌うこと」において、“現在ある”の方が“ない”に比べ有意に得点が高い傾向にあり、“今はないが昔ある”の方が“ない”に比べ得点が高かった。悪夢を経験する時には夢と覚醒時の境界が薄くなっている状態であり、また無意識と意識とを明確に区別せずその繋がりを認めている点で、「境界の脆さ」と「明確な境界を嫌うこと」の得点が高く、境界の薄さが示されたと考える。

Table 6 JBQ の悪夢経験3群による平均得点

	A1 (n=24)	A2 (n=30)	A3 (n=57)	下位検定結果
	現在ある	今はないが昔ある	ない	
境界の脆さ	24.54(9.46)	19.47(8.95)	17.86(8.61)	A1 > A3 **
明確な境界を嫌うこと	44.13(8.48)	44.23(8.09)	39.26(8.58)	A1 ≥ A3 +, A2 > A3 *
大人と子どもの境界	17.79(3.97)	18.63(4.23)	18.23(4.39)	
意識された境界の曖昧さ	20.00(3.62)	20.00(4.34)	19.25(3.81)	
境界設定のこだわらなさ	6.21(2.65)	6.03(2.68)	6.07(3.12)	
JBQ 総得点	112.67(12.49)	108.37(16.77)	100.67(14.03)	A1 > A3 **, A2 > A3 +

() はSD ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

総合考察

これまでの研究から、身体像境界や自我境界に留まらない多様な境界概念を取り上げる必要性が示唆されてきた。従って本研究では、Hartmann (1991) にならい多様な境界を想定しうる項目を盛り込んだ境界尺度の日本版を作成することを目的とした。その際、境界全体の薄さ／厚さのみで議論されるのではなく、境界の内容や質、そしてそれらの境界の組み合わせを検討することが重要であることを示すために、本研究では積極的に因子ごとに取り扱い、その妥当性を考察していく手法を取った。その結果、心的境界には「境界の脆さ」、「明確な境界を嫌うこと」、「大人と子どもの境界」、「意識された境界の曖昧さ」、「境界設定のこだわらなさ」の5つの側面が含まれることを見出した。さらに、この尺度の信頼性および妥当性の検討を行った結果、いずれもほぼ十分に認められた。ただし、「境界設定のこだわらなさ」には本研究で上げたどの尺度とも相関がみられず、因子の特性をより明らかにするためにさらなる検討が必要である。

Hartmann (1991) は境界の薄さについて、精神病理だけでなく、芸術性や創造性など肯定的な側面の可能性を強調している。JBQ の中では「境界の脆さ」が、一般大学生を対象とした健常群においてその項目平均値が相対的に低いこと (Table 2)、さらにパラノイア尺度、悪夢経験との関連が示されたことから、深く精神病理に関わる因子であることが推定された。一方で創造性や芸術性については、S-A 創造性検査の全てと相関がみられた「境界の曖昧さへの意識」が、もっとも関係している因子であると言える。本研究において、「境界の脆さ」と「意識された境界の曖昧さ」とは中程度の相関関係にあり、内的な境界が薄いという共通点については先に考察を述べた。両者の相違点は、「境界の脆さ」が悪夢経験と関連し、「意識された境界の曖昧さ」が創造性検査の全ての得点と相関がみられたことである。Hartmann (1991) は、芸術の精神分析的研究を行った Kris (1952) の (自我の自我による) 「自我のための退行」は、「自我のための」が thick で「退行」が thin であると述べている。退行が悪性のものであると精神病理にみられる症状と重

なるが、一方で良性のものであると芸術や創造性と結びつくことを併せて考えると、本研究中の「意識された境界の曖昧さ」は、自分の境界の曖昧さを意識しつつ、時にはその状況を受け入れ、時には傷つきやすさや狂気への不安をも認識できる点で、芸術家や創造的な人たちにみられる良性の退行と関連しているのではないかと推測される。つまり、境界の薄さを自覚しコントロールできた時には創造性を発揮し、自覚できずコントロールできなくなると精神病理に結びつくと考えられるだろう。現在、臨床群や芸術家群を調査対象とし、本研究の結果を実際の臨床像や創造的過程と照らし合わせ確認する試みを行っている。

JBQ は、臨床現場におけるクライアント理解を促進するものとして利用できる。各境界的側面に注目することで、クライアントの内的世界がどのように現実世界に影響を及ぼし現実の言動を左右するのか、そして彼らが他者に対しどのような距離を取り接する人であるか、どれ程鮮明なイメージを持ち創造力の豊かな人であるか、といったことへの理解が広がるだろう。また、ある境界的側面の薄さに対し、他の境界的側面を厚くすることでバランスを取っているなど、刺激やストレスへのクライアント独自の対処や防衛の方法を知る手がかりにもなると考える。

本邦においては、たとえば亀口 (1992) が家族システム論の心理的構造と機能について、より生物学的あるいは生命的なニュアンスに富む「境界膜」の概念を提唱している。今後、質問紙調査で得られた結果に留まらず、日本の社会的特性にも配慮した境界概念をさらに発展させていくことが、同時に求められている。

<注> C大学の学生107名のJBQ得点は、「境界の脆さ」: 26.00 ($SD=12.40$), 「明確な境界を嫌うこと」: 38.90 ($SD=9.16$), 「大人と子どもの境界」: 18.85 ($SD=4.00$), 「意識された境界の曖昧さ」: 20.34 ($SD=3.90$), 「境界設定のこだわらなさ」: 6.86 ($SD=2.38$), JBQ 総得点: 112.14 ($SD=17.68$) であった。

<付記> 本論文をまとめるにあたり、科学研究費補助金の助成を受けた。ご指導いただきました

た九州大学名誉教授北山修先生をはじめ, Taka Morioka-Hasslein さん, 顔俊鴻さん, 佐伯祐一先生に感謝申し上げます。また, 調査にご協力いただきました皆様にも心よりお礼申し上げます。

文献

- American Psychiatric Association (2000) : *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*, Forth Edition, Text Revision. Washington, DC :American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕・染他俊幸 (訳) (2002) : DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 馬場禮子 (1967) : 境界例とその周辺領域 ロールシャッハテストによる精神力動的的研究 精神分析研究, 8, 2-20.
- Baron-Cohen S, Richler J, Bisarya D, Guranathan N & Wheelwright S (2003) : The systemizing quotient : an investigation of adults with Asperger Syndrome or high-functioning autism, and normal sex differences. *Philosophical Transactions of the Royal Society, Series B*, special issue on "Autism: Mind and Brain," 358 (1430), 361-374.
- Federn P (1952) : *Ego Psychology and the Psychoses*. Imago Publishing.
- Fisher S & Cleveland SE (1958) : *Body Image and Personality*. Princeton: Van Nostrand.
- Freud S (1900) : *The Interpretation of Dreams*. Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud 4-5. 高橋義孝 (訳) (1968) : 夢判断 フロイト著作集2 人文書院
- Hartmann E (1989) : Boundaries of Dreams, Boundaries of Dreamers: Thin and Thick Boundaries As A New Personality Measure. *Psychiatric Journal of the University of Ottawa*, 14, 557-560.
- Hartmann E (1991): *Boundaries in the Mind: A New Psychology of Personality*. New York: Basic Books.
- Howard L (1985): Paterns of Ego Boundary Disturbance in Neurotic, Borderline, and Schizophrenic Patients. *Psychoanalytic Psychology* 2 (1), 47-66.
- 亀口憲治 (1992) : 家族システムの心理学 <境界膜>の視点から家族を理解する 北大路書房
- 木場清子, 木場深志 (1981) : ロールシャッハ身体像境界得点についての基礎的研究 —第2報 精神分裂病について— ロールシャッハ研究XXIII, 113-127.
- 小出れい子 (2000) : 精神分裂病の身体像 ロールシャッハ・テスト反応の検討 心理臨床学研究, 18 (5), 454-464.
- Kris E (1952) : *Psychoanalytic Explorations in Art*. International University Press. New York. 馬場禮子 (訳) (1976) : 芸術の精神分析的研究 岩崎学術出版社
- Landis B (1970) : *Ego boundaries*. International Universities Press. 馬場禮子・小出れい子 (訳) (1981) : 自我境界 岩崎学術出版
- Levin R, Galin J & Zywiak B (1991) : Nightmares, Boundaries and Creativity. *Dreaming: Journal of the Association for the Study of Dreams*, 1, 63-75.
- MMPI 新日本版研究会編 (1993) : 新日本版 MMPI マニュアル 三京房
- 坂本真士 (1997) : 自己注目と抑うつ の社会心理学 東大出版
- Schredl M, Nurnberg C & Weiler S (1996) : Dream Recall, Attitude Toward Dreams, And Personality. *Personality & Individual Differences*, 20, 613-618.
- 創造性心理研究会編 (1969) : S-A 創造性検査手引 O・A・B・C 版共通 東京心理
- Tausk V (1919) : *On the Origin of the "Influencing Machine" in Schizophrenia*. In : Fliess R (ed) (1967). *The Psychoanalytic Reader*. Vol. 1. International Universities Press, New York, 31-64.

(2012.11.10受稿, 2012.12.10受理)

Development of Japanese Boundary Questionnaire (JBQ) and an examination of its relation to psychopathology and creativity

Emi KODAMA

Hartmann (1991) developed the “Boundary Questionnaire (BQ)” scale to measure thick and thin boundaries in the mind. The purpose of this research was to translate the original version of BQ from English into Japanese in order to develop the Japanese version of BQ (JBQ). In Study 1, the subjects were 460 university students and analysis was performed to examine the internal factor structure of the scale. Results showed that JBQ is composed of five factors: “boundary fragility,” “dislike of rigid external boundaries,” “boundary between adults and children,” “consciousness ambiguity of boundaries” and “tendency not to set boundaries.” In Study 2, the validity of JBQ scale was proved after examining the results of a comparison of JBQ scale with other scales, such as the Paranoia scale and the K score in MMPI, preoccupation scale, creativity test and nightmare experience. Moreover, it was suggested that “boundary fragility” is a factor related to psychopathology, and correlations between “consciousness of ambiguous boundaries” and creativity were demonstrated.

Key words: Japanese Boundary Questionnaire, psychopathology, creativity